米・英の中立条約違反

さて問題の日米交渉であります。昭和十五年にアメリカは日本との通商条約を破棄します。続いてイギリスも破棄します。明治以前からの通商ができなくなってしまいます。そして一番重要ですがアメリカは、支那事変末期にＡＢＣＤラインを形成します、Ａはアメリカ、Ｂはブリティシュのイギリス、Ｃはチャイナの中国、Ｄはダッチのオランダ、この四ヵ国が日本に対する貿易を止めてしまうのです。経済封鎖をするのです。これは日本にとって大変なことでした。今でもそうですが、資源の少ない日本は、外国から資源を輸入して、それを加工して輸出するという経済体制です。その輸入が止まってしまってはどうにもなりません。

昭和十六年六月十七日には日蘭（オランダ）交渉が破談になります。小林一三商工大臣が一年間にわたってオランダの植民地インドネシアの石油を輸出して欲しいと交渉するのですが、これが不調に終わります。そしてついに八月一日アメリカは石油禁輸を行います。これで日本に入ってくる石油はゼロに等しくなります。血の一滴は石油の一滴と言われた時代であります。日本にとって石油は９９％輸入であります。その石油が止められたらどうなりますか。軍艦は動かない、戦車もトラックも走れない。そればかりか工業も止まってしまいます。ルーズベルトは日本に石油を輸出禁止すれば戦争になることを百も承知しており、そのことを方々で演説しています。石油を止めれば戦争になることを知っていながら、敢えてこれを決行したのです。

日本はその前、六月二十八日に今のベトナムの北部仏印（フランス領）に進駐します。ベトナムに進駐しましたのは、重慶に押し込められた蒋介石政権に対して英米は援蒋物資（蒋介石への援助）を送り込んでいましたが、これを止めるためのベトナム進駐であります。さらに米英は「ビルマルート」というビルマから雲南を通って四川省の重慶に通ずる道を作り、裏側からの援蒋ルートで武器弾薬や食料等を送っていたのです。つまり米英はハノイからとビルマからと二つのルートから蒋介石の抗日軍事援助をおこなっていたのです。

パール博士はこれについて「アメリカは中立条約を公然と犯した。すなわちこの時点で、日本と戦争を開始したことになる。日本への挑戦だ！」と言われています。アメリカの援助はこれだけではありません。昭和十五年の段階で、アメリカは軍事顧問団と二百人の飛行士を蒋介石軍に送り、日本と戦わせています。つまり、軍事的にもアメリカは対日参戦しているというのがパール博士の意見であります。これは国際法から言いましても、アメリカの行動はまさしく中立条約違反であります。更にアメリカは、十五年九月の段階で重慶政府に対して二千五百万ドルの借款を、十一月の段階で一億ドルの借款を与えています。十二月にはイギリスが千万ポンドを蒋介石に与えています。それに加えて日本に対しては厳しい経済封鎖をしたのです。

そこで追い詰められて困った日本は、十六年九月六日に御前会議が開かれます。この御前会議には、閣僚と陸軍参謀総長・海軍軍令部総長といった上層部の人達が集まりまして、次のようなことが決められました。

一つには、この状態では対米英戦争は避けることはできない。二つには、しかし同時に外交に全力を尽くして平和裏に解決の道をさぐる。三つには、十月上旬までに交渉がまとまらない場合は、対米英戦争の決意をせざるを得ない。このようなことが決められるのですが、このときじっと沈黙して会議の模様をご覧になられていた昭和天皇は、懐から紙を取り出されてまして、

よもの海　みなはらからと思う世に　など波風の　たちさわぐらむ　（明治天皇の御製）

とお詠みになられます。

つまり昭和天皇は「戦争を早まって決意したりしてはいけない、もっと外交に尽力せよ」とおっしゃったわけです。憲法上、天皇陛下は御前会議で、御自分の御意見を仰るわけにはいかないので、明治天皇の御製にお託しになられて、お気持ちをお述べになられたのです。